

筑波大学附属図書館常設展

古典籍のインターフェイス

筑波大学附属図書館常設展

古典籍のインターフェース

会場 筑波大学附属図書館（中央図書館貴重書展示室）
主催 筑波大学附属図書館

凡 例

1. 本書は筑波大学附属図書館常設展「古典籍のインターフェース」の図録である。なお、本常設展は令和5年度筑波大学附属図書館企画展「古典籍のインターフェース」の展示内容を踏襲しているが、一部の貴重図書についてはパネル展示としている。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。
3. 本書の図版番号は、展示資料の番号と一致するが、展示の順序は必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛する。
4. 掲載資料の表題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 本書は以下の分担で執筆し、編集および校正については企画展ワーキンググループが行った。

谷口孝介(人文社会系教授) はじめに、第I部、第IV部、
コラム「本文と注疏」

葛西太一(人文社会系准教授) 第II部

茂野智大(人文社会系助教) 第III部

目次

目次.....	1
はじめに.....	1
第I部 本のかたち.....	2
第II部 本の構成.....	9
第III部 写した本・刷った本.....	17
第IV部 本を分類する.....	21
参考文献一覧.....	28
掲載資料一覧.....	29

はじめに

この常設展示は、文化遺産としての古典籍への最適のアクセス方法を提案することを目的とする。現在では古典といっても洋装本で読むのがふつうである。しかし書物としての古典籍には読まれるための仕掛けが種々施されている。今回の展示では、その仕掛けをひも解くために、第I部「本のかたち」、第II部「本の構成」、第III部「写した本・刷った本」、第IV部「本を分類する」の四つの視点を設けた。第I部では装訂、形状など外形から本にアプローチする。第II部では表紙、題目、序跋、本文、注釈、奥書、刊記、書き入れ、蔵書印など本を構成するさまざまなレベルの要素に注視し、それぞれの情報価値について紹介する。第III部では写本、版本、複製本など製作方法の差による本文の質の違いに注目し、同一の書物であっても製作の意図によって差があることを明らかにする。第IV部では図書館の使命のひとつである収蔵(アーカイブ)の意味について考える。たんに資料を集積するだけではなくそれを活用するためには適切な分類が必要となる。分類には人類の知的遺産として、漢籍の四部分類や仏典における三蔵があり、それらは目録として生成する。ここでは目録およびコレクションとして収蔵される群についても紹介する。

なおこの常設展示は、附属図書館研究開発室のプロジェクトの一環として企画された。

第I部 本のかたち

ここでは古典籍の形態、おもに装訂に注目して書物の特徴を観察してみよう。

今日多くの古典籍は袋綴^{ふくろとじ}の形態である。二つ折りにした料紙^{りょうし}の右側綴じ目の方から見て、袋状になっていることからの名称である。中国ではこれを線装本^{せんそうほん}と呼ぶ。しかしこの装訂が普及したのは、日本では江戸時代からで、遑^{はな}っても室町時代からである。書物のもっとも古い形態は卷子本^{かんす}である。今日でも全集などで何巻目などとふつうに使用する「巻」は、書物の原初形態の名残^{なごり}と言えよう。継本^{つぎほん}の別名があるように、紙を継ぎ合わせて軸芯^{じくしん}を添えて巻いておくものである。巻首に本紙を包み込む表紙(絹などを使用することが多いので標紙とも書く)を付け、結ぶための帯(紐)が付く。定家自筆本『土左日記』(資料9)が伝える紀貫之自筆本は、白紙のままの表紙を付した26枚の紙をつないだ無軸無紐の卷子本で、表紙に打ち付けで「土左日記〈貫之筆〉」と書かれていたと言う。おそらく手控えのようなものであったことが想定される。ちなみに「裏書」も卷子本独自の書式で、表の本文のちょうど裏の箇所^{ところ}に本文に関するコメントを書くことができ、裏返せばかんたんにその箇所のコメントを見ることができる。卷子本は比較的かんたんに装訂できるが、保管には場所をとり、本文を閲覧するには不便である。絵巻物のように物語の展開に沿って順々に展開して閲読するには好都合であっても、たとえば事典のような典籍を考えると、ある項目を検索したくとも、巻の途中や末尾まで展開してゆかなくてはならないこともある。また古代の寺院には『大般若経』600巻が蔵され、それを転読することがあったが、600巻もの経巻^{けいばん}の繙読^{ほんどく}や保管は困難が予想される。そこで多くの経巻については折本の形態が見られるようになる。当初の卷子本を折本に仕立て直すことが行われた。『蒙求』(資料5)も原卷子本を袋綴に仕立て直したもので、おそらく卷子本の状態でかなり傷んでしまったので、補強を兼ねて袋綴としたものであろう。中国において卷子本、折本に次いで、宋代あたりより粘葉装^{でんちようそう}が盛んになる。料紙を半折して重ね合わせ、各紙の外側を糊付けして表紙を加えたものである。雁皮紙など上質の厚手の料紙を使うことが多く、紙の裏表に文字を書くことができる利点がある。糊付けしてある面を開くと蝶が羽を広げたように見えることから胡蝶装^{こちょうそう}の別名がある。日本においても平安時代後期あたりより見られるようになる。粘葉装から工夫されたものが綴葉装^{でんちようそう}で、若干の料紙を重ね合わせて半折一括りとして、数括りを重ねて、表紙を添えて糸でかがったもの。定家本『土左日記』も原卷子本を綴葉装で書写製本している。

書物の形態は外形的、物理的問題であるばかりでなく、その形態によって読まれる内容を導いたり規制したりするものでもある。卷子本で書かれていた内容が冊子本で写されたときに新たな読書世界が展開することとなるのである。

和書の装訂(図)

卷子本

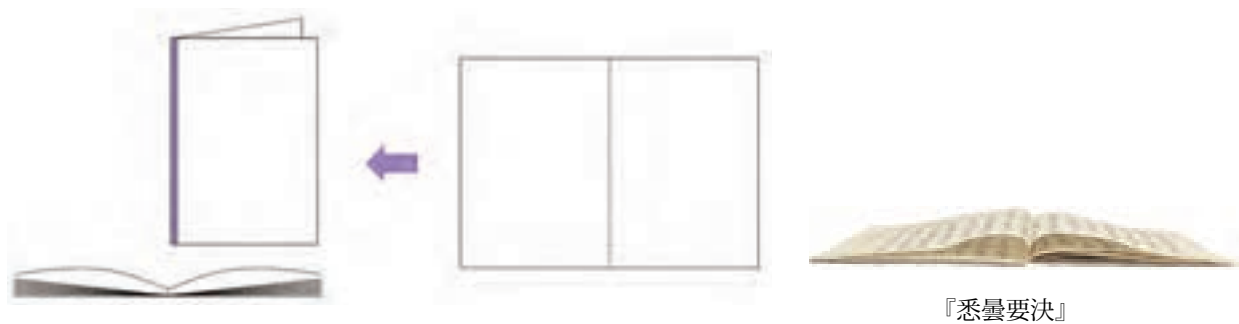
書物のもっとも古い形態で、紙を継ぎ合わせて軸芯を添えて巻いておくもの。
巻首に本紙を包み込む表紙を付け、結ぶための帯(紐)が付く。



『菅家伝』

粘葉装（胡蝶装）

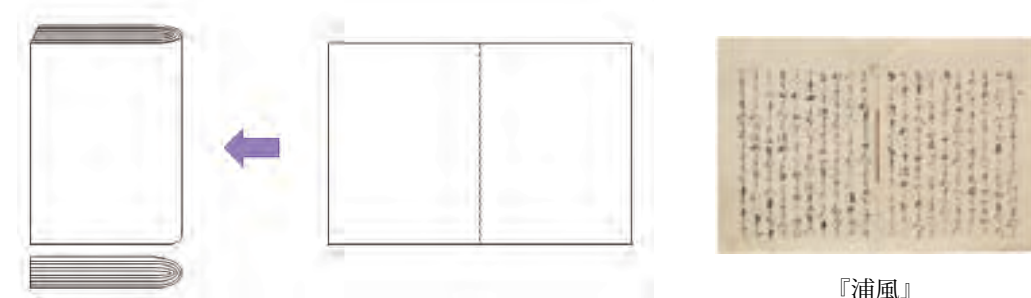
料紙を半折して重ね合わせ、各紙の外側を糊付けして表紙を加えたもの。
糊付けしてある面を開くと蝶が羽を広げたように見える。



『悉曇要決』

綴葉装（列帖装）

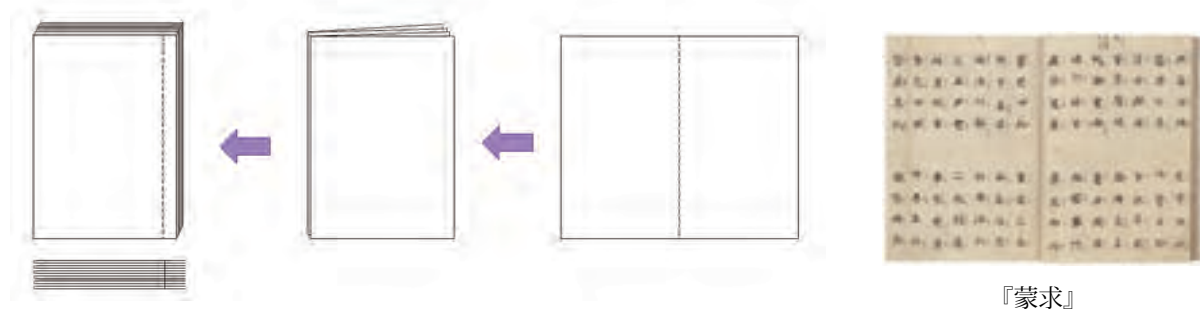
若干の料紙を重ね合わせて半折一括りとして、数括りを重ねて、表紙を添えて糸でかがったもの。



『浦風』

袋綴

料紙を二つ折りにして重ね、折り目と反対の端を糸で綴じたもの。
二つ折りにした料紙の右側綴じ目の方から見て、袋状になっている。



『蒙求』

すみよしものがたり え まき 1『住吉物語絵巻』 2軸

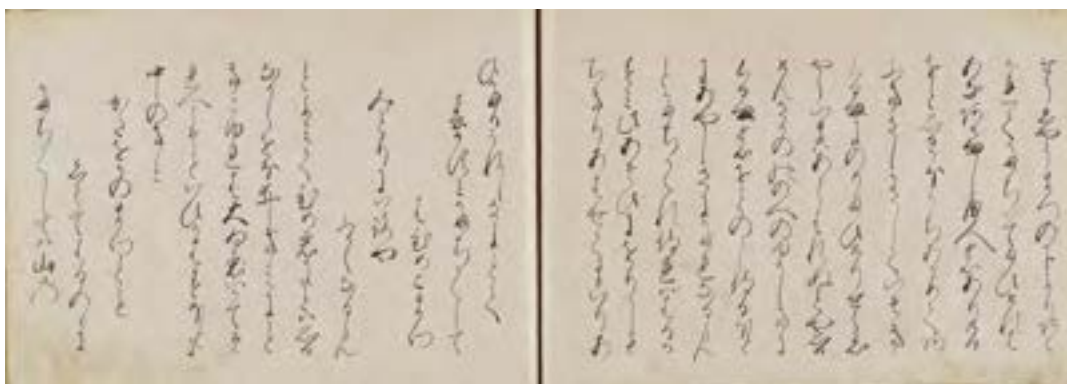
室町時代初期-中期



鎌倉時代の『住吉物語』に取材した絵巻物。現状は改装補修の際の錯簡補写を交えて順序もなくつなぎ合わせた零本となっているが、室町期に遡る奈良絵による絵巻。『住吉物語』原作は『源氏物語』以前10世紀に作られたが、現存本は鎌倉時代の改作で、霊験譚の要素をもつ分かりやすいシンデレラ・ストーリーとして後世に受容された。

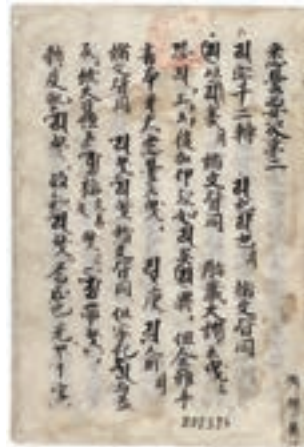
すみよしものがたり 2『住吉物語』 5巻4冊 (巻1欠)

江戸時代初期



鎌倉時代の『住吉物語』に取材した奈良絵本。横本。表紙は濃紺地に金泥草花松等(各冊異なる)模様、見返しは菱形紋押銀箔、料紙は間に合い紙を使用し、各冊ともに6面の画図がある典型的な奈良絵本。各面13行で写すが、行間を均等にするため見当針を通して目印を付けている。

3『^{しったんようけつ}悉曇要決』 4巻4冊
^{しんごう}信毫写 天福2(1234)年



平安時代中期の天台僧で日本悉曇学(音韻学)中興の祖、^{めいかく}明覚(1056-1106以前)の作。悉曇(サンスクリットについての研究)の概説であるが、当時の日本語の音韻と比較して記述した点が平安時代語の記述として注目される。本書は各冊奥書に、治承5(1181)年に越前^{とよはら}豊原寺で写されたものを、天福2年に伊豆走湯寺などにおいて^{そうどう}信毫が写したとある。各冊表紙に「成菩提院」「心俊」と所有者の署名があり、粘葉装の原装訂を残す。

4『^{うらかぜ}浦風』 3巻1冊
 江戸時代初期



室町物語。海からの風に感応して生まれた浦風姫が比叡山の^{しんにょ}真如僧都の母となる伝記物語。上中下3巻を1冊にまとめる。各巻に奈良絵風の画図4面があり、すべてで12面となる。印記「残花書屋」は、明治、大正時代の詩人、評論家で、紀州徳川家南葵文庫主任、日本女子大教授を務めた^{なんき}戸川残花(1855-1924)の蔵書印。綴葉装(列帖装とも)で、赤と白のかがり糸でかがり止めされている。

5『蒙求』 1冊

(唐)李瀚著 室町時代後期



中国の児童用の教科書。古代から南北朝までの古人の言行を題材として、暗唱しやすいように4字句で表し、類似の故事を一对にしている。形態として朗誦用の標題本と、標題ごとに典拠本文を摘記した注本との二種がある。本書は前者で、朗誦できるように全文に声点、漢字音のカナが付されている。印記「弥家蔵書」は、太政官の文書をつかさどる職を世襲した小槻宿禰家の蔵書印。原装卷子本を袋綴に改装してある。

6 嘉慶2年4月5日 [足利義満御判御教書]



きたのしゃけ
北野社家松梅院旧蔵「北野神社文書」の1点。中世の文化史・社会経済史上重要な資料群である。本紙は嘉慶2(1388)年4月5日に、筑後国御井郡に置かれた北野社領庄園について、將軍足利義満が、地頭北野家兼の子孫らによる競望と守護以下の妨げとを停止し、北野社に安堵することを証したものである。「左大臣源朝臣」のあとに義満の花押を押す。

7『長秋詠草』 3巻1帖

室町時代中期



ふじわらのとしなり
藤原俊成(1114-1204)の家集。治承2(1178)年3月に成立し、同年夏守覚法親王に進覽された俊成自撰の原形本の形を伝える本。上巻に久安百首・述懐百首を、中巻に四季歌・賀歌・恋歌を、下巻に雑歌・釈教歌・神社歌その他をそれぞれ収める。古筆了雪(1612-1675)によって姉小路基綱(1441-1504)筆と鑑定されている。綴葉装。

8『源氏物語』 54巻付1巻 53冊 (欠2巻)

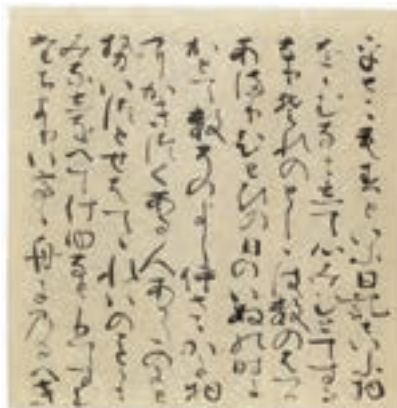
江戸時代中期



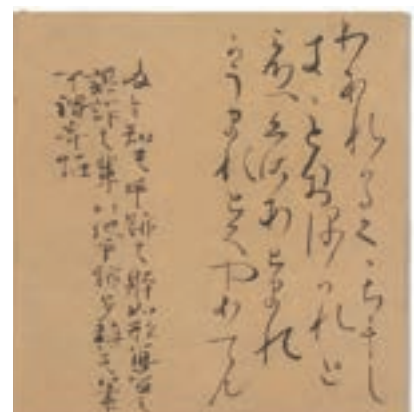
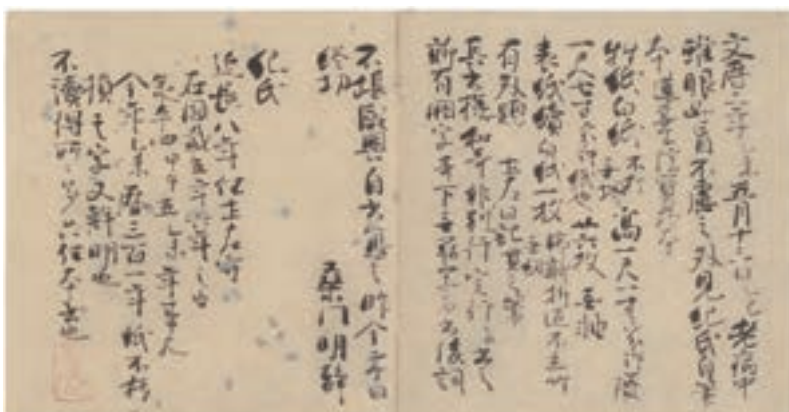
紺地の表紙に、当該の巻から想起される草木の下絵が金泥で描かれており、黒漆塗抽出筆筒に収納されている。その作りは、江戸時代前期、中期の嫁入り本の典型。胡蝶巻、宿木巻欠。貴重な調度品として保管されていたことをうかがわせ、書入はほぼない。続篇とされる山路露巻^{くろうしぬりひきだしたんす}を付す。綴葉装。

9『土左日記』 1巻 (尊経閣叢刊)^{とさにつき} (複製)^{そんけいかく}

東京：育徳財団 昭和3(1928)年



藤原定家^{ふじわらのさだいえ}(1162-1241)自筆、前田育徳会尊経閣文庫蔵国宝「土左日記」の複製本。定家の奥書によると、文暦2(1235)年5月に蓮華王^{れんげおう}院宝蔵の紀貫之自筆「土左日記」を見得て、それを書写した。原本は白紙のままの表紙を付した縦40センチ、横51センチほどの紙26枚をつないだ無軸無紐の卷子本で、外題には「土左日記〈貫之筆〉」と書かれていたという。さらに原本の面影を伝えるために末尾14行分を臨模して残してある。綴葉装。



10『孝経』 1冊

(漢)孔安国伝

文政6(1823)年跋

孔子が説いた孝道を中心とした^{そうし}曾子学派の著。『論語』と並んで、儒教の基本図書として重視された。孔安国伝は中国においては唐末五代の間に^{みょうぎやうどう}亡逸したが、日本においては明経道博士清原、中原両家に伝承されて、後世まで盛行した。本書は現伝しない弘安2(1279)年の年紀をもつ卷子本を文政6年に模刻刊行したもの。出版の経緯は原本の所蔵者であった^{あべまさきよ}福山藩主阿部正精(1775-1826)の跋に詳しい。なおこの跋文が藩儒伊沢蘭軒(1777-1829)の手になることは、森鷗外『伊沢蘭軒』に語られている。



11『孝経』 1冊

(唐)玄宗注;狩谷望之校

湯島 [江戸]: 求古楼 文政9(1826)年跋

天寶5載(746年)重注の玄宗御注孝経北宋版本を、文政9年に^{えきさい}狩谷望之(極斎)(1775-1835)が模刻刊行したもの。極斎による『孝経』の中日にわたる伝来から説き起こし、原本を模刻刊行する意義をいう長大な跋が載る。本書の原本、孤本である北宋版本は宮内庁書陵部現蔵にかかり、1023年から1033年の間の刊本で、もと極斎の求古楼に蔵されていた。ほぼ原本の面目を伝える優れた翻刻本である。



第II部 本の構成

古典籍の内容とその本の成り立ちとは、本来、不可分の関係にある。その内容に応じて、表紙や料紙に意匠を凝らす場合があれば、文字の大きさや配置を調整したり、著述の経緯に関する説明を加えたりする。第II部では、活字化・デジタル化された古典籍のテキストに頼るばかりではなく、実際に本を手にとることによって、はじめて気づくことのできる情報に目を向けたい。

古典籍の書名は必ずしも本の表紙に記されたものに従うわけではない。本の表紙には書名を記した題簽^{だいせん}が貼られるものの、往々にして剥がれ、あるいは表紙ごと改装され、題簽に記された外題^{じよぼつ}のみでは書名を判断できない場合が多い。そのため、本文の巻頭や目録や序跋^{ないだい}に記された内題等と見比べる必要がある。そもそも古典籍のなかには書名の統一されない場合があり、それらの揺れを含めて、本の成立や伝来を考える端緒ともなる。

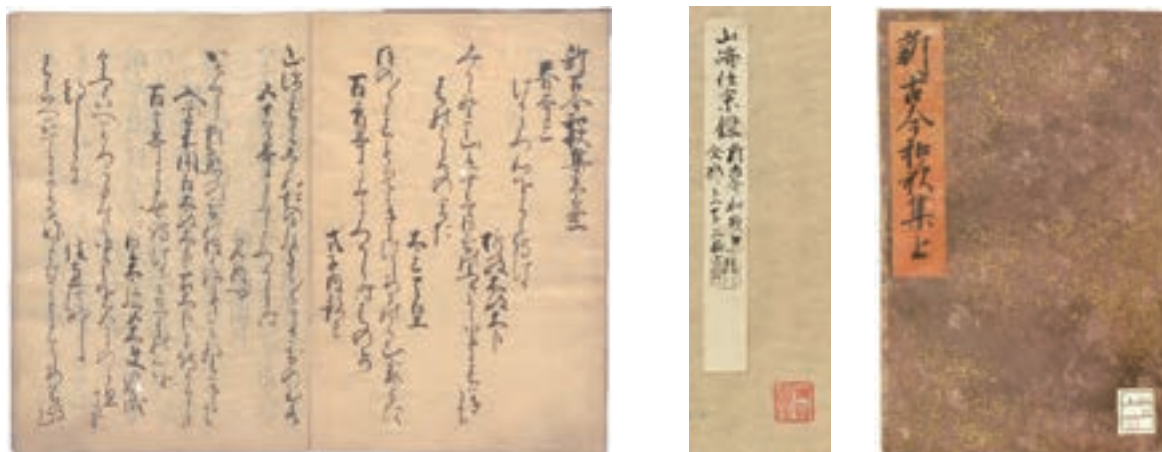
書名の定め難い場合があるように、古典籍の本文そのものもまた、現代のそれと比べて固定的とは言えない。写本の時代には、筆写を繰り返すうちに誤脱^{ごだつ}や衍入^{えんにゅう}が生じ、どの本文が原典に近いものか判然としない場合が多い。印刷技術の発達した時代になっても同様の問題が自然と解消されるわけではなく、今でも複数の伝本を見比べて本文の復元を図る校合^{きやうごう}と呼ばれる作業が必須となる。そのとき、本の成立や伝来の経緯を記した序文・跋文^{しよぶん}・識語^{しきご}・奥書^{おくがき}・刊記^{かんき}・奥付^{おくづけ}といった情報が重要な意味を持つ。その本が形作られる際、著述の経緯や目的が記されたものを序文や跋文と呼び、本の成立後に書き加えられたものを識語と呼ぶ。それが写本であれば、巻末に置かれて筆写の来歴が記されたものを奥書と呼び、いつ誰が何を筆写したのか、書き写されるたびに奥書が増える。それが刊本であれば、出版年や出版に携わった書肆^{しよし}、ときには他の本の広告を伴って巻末に刊記と呼ばれるものが付され、これを奥付とも呼ぶ。いずれも本の性質を知る重要な端緒であり、これを参考として校合が行われる。

識語がそうであるように、本は読み継がれるうちに情報が付加される場合があり、所有者の蔵書印が押されたり、古筆の鑑定を記した極札^{きくふだ}が挿まれたり、読み手の注釈が余白や付箋に書き入れられることもある。そうして時代がくぐれば日常的に使用する言葉が変わり、本に書かれているまま理解することが難しくなり、解釈の指針を示した注釈書が世に行われるようになる。注釈書には、古典籍の成立した当時の解釈に立ち返ろうとする立場もあれば、それを受容する人々の思想を投影する立場もあり、それらを比較すると各時代状況に応じた解釈の変遷をたどることができる。漢籍では經典に対して「伝」「注」「疏」「音義」という注釈の形式が発達し、あるいは、口頭で伝えられた先賢の解釈が「聞書^{ききがき}」「抄物^{しやうもの}」と呼ばれる形式で残された。

そこに記載された本文の内容のみならず、本を構成する要素は思うより多い。それらは有機的な結び付きをもって互いに互いを意味づけるものであり、本文の内容は独立して成り立つものではない。活字化・デジタル化された古典籍のテキストのみからは知り得ない情報がいまだに多く残されていることを思えば、今もなお本に立ち返って読み解かざるを得ないのである。

12『新古今和歌集』 20巻2冊

源 通具等奉勅撰；山崎宗鑑写 室町時代中期



奥書はなく、江戸時代前期の古筆鑑定家、古筆了祐(1645-1684)の「山崎住宗鑑〈新古今和歌集/全部上下二冊〉」という極札により、山崎宗鑑の筆とされる。表紙は藍色金砂子。重ねた料紙を二つ折にして綴じる綴葉装。料紙は両面書写に用いられる厚手の鳥の子。古写本の蒐集家として知られる大島雅太郎(1868-1948)による「青谿書屋」の印記がある。本書は小学館の新編日本古典文学全集『新古今和歌集』の底本に用いられる。

13『伊勢物語』 2巻2冊

作者不詳



平安時代に成立した歌物語。必読の古典として後の時代にも広く受容された。垣間見に始まる男女の逢瀬を描いた「むかしおとこうみかうふりして」から始まる一節は、今でもこれを採択する教科書が多い。装訂は綴葉装で、四つの穴をあけて上二つ下二つの穴をそれぞれ別の糸で綴じる。筑波大学の前身である東京高等師範学校の教授を務めた岡倉由三郎(1868-1936)による「岡倉文庫」の印記がある。

い せ ものがたりしやうもんしやう
 14『伊勢物語肖聞抄』 3巻3冊
 そうぎ しょうはく
 宗祇述；肖柏記 慶長14(1609)年刊



内題には「伊勢物語^{さきがき}聞書」とあるが、外題の「肖聞抄」に従う。代表的な『伊勢物語』古注釈書の一つ。嵯峨に住した豪商の角倉素庵^{すみぐらそあん}(1571-1632)による刊行とされ、漢籍仏典の版行を主とした当時、日本の古典文学作品が出版された意義は大きい。刊記に見える「也足叟素然^{やそくそうそねん}」は、江戸時代前期の公卿、中院通勝^{なかのいんみちかつ}(1556-1610)のこと。本文は古活字版、刊記のみ整版。東京文理科大学初代学長の三宅米吉^{みやけよねきち}(1860-1929)の「三宅蔵書」の印記がある。

い せ ものがたり い せいしやう
 15『伊勢物語惟清抄』 1冊
 さんじやうにしきねたか きよはらのぶかた
 三条西実隆述；清原宣賢記 製作年不詳



代表的な『伊勢物語』古注釈書の一つ。巻首に清原宣賢(1475-1550)の自序が見え、大永2(1522)年5月に受けた三条西実隆(1455-1537)の講義を書き留めたことが分かる。このような師説の口伝^{くでん}を筆録したものを幅広く「聞書」と呼び、とくに古典籍の通釈を主とした口語体の講義録を「抄物」と呼ぶ。巻末の奥書には、同年9月に実隆自身が校閲したことを証し、宣賢の娘を妻とした左大史の小槻伊治(1496-1551)が大永3(1523)年6月に朱点を入れたことを記す。

16『伊勢物語(真名本)』 2巻1冊

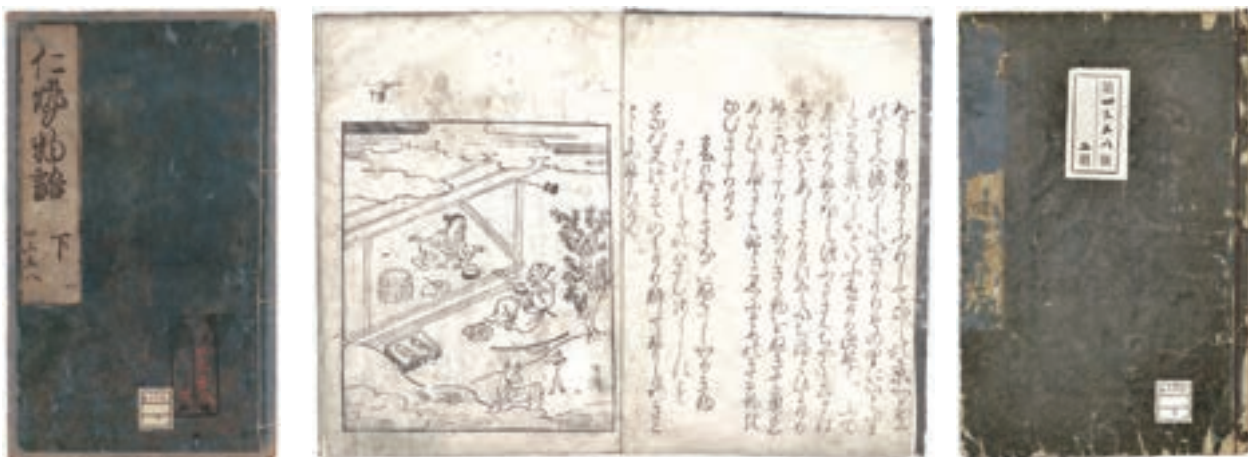
建部綾足校訂 京：風月荘左衛門 明和6(1769)年刊



京都の大書肆、風月荘左衛門(1701-1782)による売り出し。書名は国文学研究資料館国書データベースによるが、内題・尾題・版心には「伊勢物語」、外題には「旧本伊勢物語」、序には「楷書勢語」とある。ほかに漢字のみによって表記される伊勢物語の真名本は数本が残されるものの、その文字遣いには誤りが多いため、仮名本の成立を遡るものとは考え難い。本書は、その文字遣いの誤りを建部綾足(1719-1774)が正したものという。

17『仁勢物語』 2巻2冊

作者不詳 江戸時代初期刊



書名は下巻の外題による。上巻は第一次版本とされるが、下巻は第一次版本を覆刻した第二次版本で、柱の部分に丁付け等が加わる。書名の「仁勢」は「似せ」の意で、その内容は『伊勢物語』をもじったパロディ。初段は「をかし、男、ほうかふりして」から始まる。江戸時代初期には『伊勢物語』の流行を受けて、同書のパロディが数多く出版された。本書は岩波書店の日本古典文学大系『仮名草子集』の底本に用いられる。

コラム

本文と注疏

資料18と資料19とをよく見比べてほしい。資料18はかなりかすれていて見づらいが、同じ文面で字詰めも字体も同じであることが分かる。この2本はいわば親戚関係の本なのである。資料18は、日本最古の『論語』の版本、正平19(1364)年の版本の板木が現在も東京国立博物館に残っており、明治時代にその板木で印刷されたものである。板木がかなり傷んでいるので、印刷面もこのような状態である。大きな字と2行書きの小さな字があることが分かる。大きな字が『論語』の本文で、小さな字は魏の何晏(?-249)の注釈箇所である。現存最古の『論語』注釈書で「古注」と呼ばれているが、中国では早くに失われてしまっている。資料19は19世紀になって楊守敬たちが当時日本に残っていた正平版『論語集解』を探し出し、それに基づいて復刻出版したものである。資料18を印刷するときに使用した板木で印刷された14世紀の版本を忠実に翻刻したものなので、この2本がひじょうに似た版面となっているのも当然である。

読みやすい資料19を少し読んでみる。有名な為政篇の「温故知新」の箇所である。大きな字「子曰温故而知新可以為師矣」が『論語』本文で、その下の2行書き小字の「温尋也尋繹故者又知新可以為師矣」が魏の何晏の注釈である。中国の古典はこのように本文だけで読まれるのではなく、代表的な注釈とともにその注釈の解釈に基づいて読まれてきた。日本においてもその伝統は受け継がれ、奈良時代の「学令」(養老令)においても「『論語』には鄭玄・何晏が注」と、大学での講読のおりの注釈書が指定されていた。ただ何晏の注は簡略で「温は尋なり。故きを尋繹する者、又新しきを知れば、以て師と為るべきなり」とあるだけで、「温」の実質が理解しにくいものである。そこで何晏注をさらに解説したものが現れる。それが資料20の「義疏」である。これも中国では早くに失われて清代になって日本から逆輸入されたものである。南朝梁の学者皇侃(488-545)に拠るもので、「疏」とは詳しく意味を説き明かすことを言い、権威のある「注」の意義を説明することである。下の参考図のように、『論語』本文のあと白抜きで「註」とある少し小さめの字が何晏注である。資料19と比べてみると「知新者」と「者」字が増えていることが分かる。註のあとに「疏」と白抜きがあり、2行書きになっているところが、皇侃の疏である。説明が長いので一部だけを抜き出すと、「温温燭也。故謂所学已得之事也。所学已得者則温燭之不使忘失。此是月無忘其所能也」とあり、この「温」とは温め直すことで、学んだことをしっかりと温習して身に付けることを言うと言っている。この詳説があっただけで何晏注の意味が明らかになる。ただ本文と注と疏とは等価でなく、本文(経文)>注>疏の順に価値づけられている。そのことは文字の大きさによって視覚的にも表示されている。中国の経学はこのように唐代まで訓詁注釈の集積が行われており、その集大成として初唐に『五経正義』が現れる。一字一字、一語一語について、精細な訓詁注釈が施されたものではあるが、かえって経文自体の趣旨が伝わりにくくなってしまった。この弊害を取り除こうとしたのが、南宋の朱熹(1130-1200)の学問である。資料21に代表される『四書集注』は、これまでの語句レベルの訓詁注釈から、それらを踏まえつつも章段全体の意図の解明へと進める学問を切り拓いたのである。朱熹以前を旧注といい、以降を新注と呼ぶゆえである。



本文・註・疏(資料20)

18『^{ろん ごしっかい}論語集解』 2冊

(魏)何^{かあん}晏注 1890-1891年頃印



現存最古の『論語』注釈書。日本では、もと正平19(1364)年に版行されたものがあり、そこから跋文の削られた板木が明治23(1890)年ごろに現在の東京国立博物館へと伝わった際、複数部が刷られた。本書はその一部とされる。板木が腐蝕の甚だしい状態であったため読むには堪えないが、日本における『論語集解』の伝来と受容を示す資料と言える。巻首には東京文理科大学にて教授を務めた^{もろはしてつじ}諸橋轍次(1883-1982)の識語がある。

19『^{ろん ごしっかい}論語集解』 10巻2冊 (^{こいつそうしょ}古逸叢書 48冊のうち)

(魏)何晏注 光緒10(1884)年刊



駐日公使であった清・黎^{れいしよしやう}庶昌(1837-1897)によって出版された『古逸叢書』のうちのひとつ。随員であった楊^{ようしゅけい}守敬(1839-1915)とともに、日本に残る漢籍のうち善本を集めて覆刻再版したもので、本書は、堺の道^{どう}祐居士によって正平19年に版行されたことを記す跋文を持つ、いわゆる^{たんぱつぽん}単跋本に基づく。巻末には、日本における漢籍の伝存状況を解説した森^{もりたつゆき}立之(1807-1885)の手に成る『^{けいせきほう こし}経籍訪古志』を引用する。

20『^{ろん ご しっかい ぎ そ}論語集解義疏』 10巻4冊
 (魏)何晏注；(梁)^{おうがん}皇侃疏 19世紀末年刊



中国では一時散逸していたが、日本では足利学校にその写本が伝わり、江戸時代中期には儒学者の根本武^{ねもとぶ}夷(1699-1764)の手によって校刊された。これが中国に伝わり、清・乾隆帝の勅撰による一大叢書『四庫全書』に入れられ、のちには清・鮑廷博^{ほうていはく}の『知不足齋叢書』や清・鍾謙鈞^{しょうけんきん}の『古經解彙函』にも収められることになる。本書では、大字単行で記された本文に対して、まず何晏の注が続き、さらに皇侃の疏が小字双行で示される。

21『^{ろん ご しゅ き しつちゅう}論語(朱熹集注)』 10巻4冊
 (宋)朱熹注；(日本)^{はやし らざん}林羅山点

京：長村半兵衛；河南四郎右衛門；梶川七郎兵衛；植村藤右衛門 安永5(1776)年刊



題簽の下側は摩滅しているが、合刻された『大学』の題簽に「道春点」とあるように、本文には江戸時代初期の儒者である林羅山(1583-1657)の訓点が施される。何晏『論語集解』や皇侃『論語集解義疏』を古注と呼ぶ一方、朱熹『論語集注』は注釈の面画をなしたものとして新注と呼ばれる。林羅山の訓点も新注に基づいたもの。余白には多くの書き入れが見られ、それでも収まらない場合には付箋を貼付して追記される。

けいあん おしょう かほう わてん
22『桂庵和尚家法倭点』 1冊
けいあんげんじゅ
桂庵玄樹撰 江戸時代初期刊

朱熹『論語集注』をはじめとする宋学の影響のもと、新注による經典の訓法を説いた書。四書五經の注釈、句読の切り方、助辞の読み方等、古注と新注の違いを具体的に示す。それまでは博士家をはじめ古注による訓法に従っていたが、とくに五山僧を中心に宋学の影響を受けるなか、新注の解釈に基づいた訓法が求めら



れるようになった。本書は、經典解釈が新注へと傾倒する過程を示すとともに、日本における宋学受容の一端を伝える。のち、林羅山の道春点にも影響を与え、江戸時代における朱子学盛行の基礎となる。

ろん ご はくぶん
23『論語白文』 2冊
いとうぜんしゅう
伊藤善韶撰 寛政5(1793)年刊

注釈を除いた『論語』の白文に対して、孔子の古義に立ち返ろうとした伊藤仁斎(1627-1705)の『論語古義』に基づいて訓点を付したものの。巻頭には『論語古義』と同じく、仁斎の長男、伊藤東涯(1670-1736)による正徳2(1712)年の序が見える。善韶は東涯の三男、仁斎の孫にあたる。朱子学を官学と定める江戸時代において、仁斎のように反朱子学の立場を取るものもあり、本書の刊行によって仁斎の提唱する古義学の受容される様相が窺い知られる。



ろん ご こくんせいぶん
24『論語古訓正文』 2巻1冊
だざいさだやす だざいしゅんたい
太宰定保校 ; 太宰春台点 東京 : 小林新兵衛 宝暦4(1754)年刊 天明7(1787)年再板

太宰春台(1680-1747)の『論語古訓』に基づいて『論語』の白文に訓点を付したものの。春台は、朱子学や古義学を批判する荻生徂徠(1666-1728)に学び、同門の服部南郭(1683-1759)と並んで護園学派の双璧と称された。本書は、初学者向けに刊行されたもので、重刻されたことから受容の広さが窺われる。刊記には広告があり、春台の著作が並ぶ。



第III部 写した本・刷った本

古典籍はその制作方法によって^{しゃほん}写本と^{はんぼん}版本とに分けられる。写本は手で書き写された本、版本は印刷された本である。

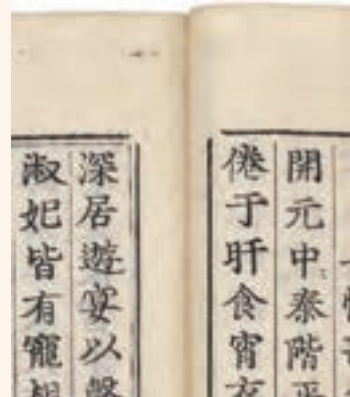
人の手で書き写された本は、書物の歴史において長く主流であり続けた。中世までに制作された書物のほとんどは写本であり、印刷は仏教関係の一部の書物に限られる。1冊の本を手で書き写すということは時間と手間のかかる作業であり、写本が主流の時代にはそのことが書物の流通と普及に限界を作っていた。また、人の手で書き写す際にはもとの本との間にさまざまな違いが生じる。書写者が意識的に書き換えることもあれば、無意識に写し間違えることもある。書物が写本として流通するということは、ひとつのテキストの様々なバリエーションを生み出すことにも繋がっていたのである。

そして多くの場合、書写者は自身がその本を書写した時期や事情を、奥書(書写奥書)に書き残した。書写される際にはもとの本にあった奥書もそのまま書き写されることが多く(本奥書)、それを見ればその写本の系統、すなわちその書物が書き継がれてきた歴史を窺い知ることができる。

他方、印刷は1冊ごとの個性と引き換えに、同じものを大量に制作することに向いている。日本最古の印刷物である『百万塔陀羅尼經』をはじめ、当初は仏教の經典(摺經)が代表的な印刷物であった。それはいわゆる写經と同じく、供養のために多くの經を制作する必要に応じたもので、大量制作に向く印刷はまさにその目的に適うものであった。やがて近世には、仏教関係に限らず様々な書物が版本として流通し、写本が主流だった頃とは比較にならないほど多くの人々の手に、同じ書物が行き渡ることとなった。著名な国学者が各地に多くの弟子をもち、手紙で教えを授けることができていたのも、版本の普及によって多くの人が同じテキストを手にしたからこそ可能になったことである。

なお、版本はその印刷方法によって^{せいはんぼん}製版本と^{かつじぼん}活字本とに分けられる。製版本は木板1枚ごとに印刷するページ全体を彫って刷られた本。活字本は1文字(ないし2～5文字の単語)単位の金属または木製の字型(活字)を並べて刷られた本である。並べた活字は四方から枠で固定されるため、印刷されると外枠(匡郭)の四隅に隙間が生じる(右下図)。また、文字ごとに墨の乗り具合に僅かな差があったり、稀に文字の向きが誤って刷られたりもする。こうした特徴から、活字本はそれと見分けることができる。

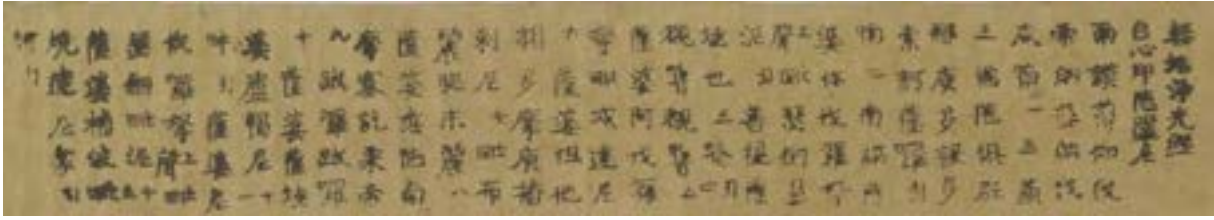
活字印刷は16世紀末から17世紀初頭にかけて盛んに行われたが、それ以降は増刷が容易な製版本が主流となった。活字本の場合、一度使用した活字は他の本の印刷に再利用されたため、増刷には不向きだったのである。また、日本では漢字の数が膨大で、仮名であっても^{れんめん}連綿に応じて多くの活字が必要となる。アルファベットのみを用いる西洋とは異なるこうした文字体系もまた、近世の日本で製版本が主流となった要因の一つであった。



活字本の隙間(資料27)

25『百万塔 附 無垢浄光大陀羅尼經自心印陀羅尼』 1枚(1基)

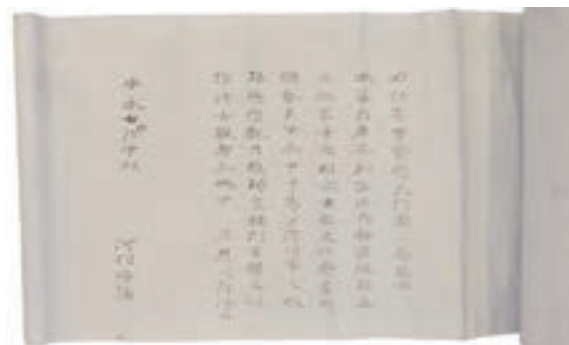
奈良 宝亀元(770)年



百万塔は宝亀元年に^{しょうとく}称徳天皇(718-770)の発願により大和およびその周辺の十大寺(大安寺、元興寺、弘福寺、薬師寺、四天王寺、興福寺、法隆寺、崇福寺、東大寺、西大寺)に分置された百万基の小塔。現在は法隆寺伝来品の一部が現存する。これらの小塔には『無垢浄光大陀羅尼經』に説かれる六種の陀羅尼のうちの四種が印刷され納入された。これがいわゆる『百万塔陀羅尼經』で、本学所蔵品はそのうちの「自心印陀羅尼」である。百万塔陀羅尼經は現存する開版年代が明らかな印刷物として世界最古のものとして知られる。

26『伴善男物語』 3巻1軸

安永7(1778)年写



出光美術館所蔵の国宝「伴大納言絵巻」の江戸後期写本。この絵巻は江戸時代にいくつかの写本が作成されたが、本書は原本3巻を1軸にまとめ、淡彩でほぼ原本の面影を伝えようとしたもの。巻末に有職故実に詳しい尾張藩士河村秀穎(1718-1783)による識語があり、藩内庫(奥御文庫)所蔵「伴善男褻応天門図三巻」を借覧して門人に模写させた^{おぼま}とある。原本は江戸期には若狭小浜藩酒井家所蔵であったので、秀穎が見た本は原本の写本であったと考えられる。原本にはない場面や詞書が存し、原本とは違った場面の順序も見られる。

はくしぶんしゅう
27『白氏文集』 71巻(巻24-37欠) 目1巻14冊
(唐)白居易著; 那波道円校 元和4(1618)年刊



中唐の白居易(772-846)の詩文集。本書は元和4年に儒学者の那波道円(1595-1648)が校訂出版した木活字本で「那波本」と呼ばれる。『白氏文集』は中国では宋代に詩を前、文を後に再編した「先詩後筆本」が生まれ、やがて原態を留める「前後続集本」が消滅したが、朝鮮銅活字版の「前後続集本」を底本とした本書は原態をよく留めている。そのため近代には中国でもその価値が知られ、『四部叢刊』の一部として影印出版された。

ていせいひたちのくにふ ど き
28『訂正常陸国風土記』 1冊
にし の のぶあき
西野宣明校訂 水戸：聴松軒 天保10(1839)年刊

ていせいひたちのくにふ ど き
29『訂正常陸国風土記』 1冊
西野宣明校訂 水戸：聴松軒 天保10(1839)年刊 後印



『常陸国風土記』は奈良時代に編纂された官撰地誌で、現存する五カ国の風土記のうちの一つ。本書は国学者で水戸藩士の西野宣明(1802-1883)が校訂して頭注を加えた『常陸国風土記』の最初の本格的な注釈書である。天保10年に水戸聴松軒から刊行され、後に水戸藩や江戸の玉巖堂(和泉屋金右衛門)から刊行された。本書は版木(茨城県立歴史館ほか蔵)や自筆稿本(静嘉堂文庫蔵)も現存する。

今回の出展品のうち、資料28は初印本で、資料29は後修本である。まず、冒頭のこみやままさひで小宮山昌秀(1764-1840)の序文末尾に版下揮毫者であるたちばらきょうしよ立原杏所(1786-1840)の署名があるが、前者はそこに落款印があるのに対し、後者はない。立原杏所は本書刊行の翌年に亡くなっており、印は初印本のみに捺されたものと思われる。また、本文17丁裏の頭注を見ると、前者で黒くベタ塗りになっている部分が、後者では加筆されている(写真参照)。彫らずに残しておいた部分に、後から加筆した注を彫ったものだろう。

30『古今和歌集』 20巻2冊

紀友則ほか撰 正和元(1312)年



平安時代前期に成立した最初の勅撰和歌集。本書は藤原定家校訂本のうち二条家相伝本である貞応本系に属する写本。ただし定家本の本奥書はない。烏丸光広(1579-1638)の極書(下巻末)や古筆了仲(1656-1736)の極札(別紙)には、世尊寺流第12代行尹(1286-1350)の筆とする。奥書によれば正和元年に二条為親自筆本を書写・校合し、翌年に宗匠本(二条為世本)でさらに校合したという。朱筆の声点や勘物もこうした諸本から書き写したものだと思われる。なお、定家自筆本やその忠実な写本は本来、全1冊で歌を一行書きにするが、本書は上下2冊に分け、歌は二行書きし、新しい巻は必ず見開きの右側から書き始めるなど、全体にゆったりとした作りになっている。

31『古今和歌集』 20巻2冊 (二十一代集 56冊のうち)

紀友則ほか撰 京都：吉田四郎右衛門 正保4(1647)年刊



平安時代前期に成立した最初の勅撰和歌集。本書は京都の書肆、吉田四郎右衛門が刊行した二十一代集の一部で、正保4年の刊記を持つことから正保版二十一代集と呼ばれる。吉田四郎右衛門は近世前期から幕末にかけて多くの書籍を刊行した書肆で、中でも二十一代集は200年以上にわたって増刷を続けた主力商品であった。ただし、古今和歌集を含む八代集相当部分は、当初別の書肆から刊行されており、その版本が元禄10(1697)年・宝永6(1709)年頃に吉田四郎右衛門に渡った際、新古今和歌集巻末に正保4年の刊記を入れて刊行された。本学所蔵品には新古今和歌集と新続古今和歌集の巻末にそれぞれ吉田四郎右衛門の刊記があることから、これ以降の刷りと考えられる。

第IV部 本を分類する

第IV部では図書館の使命のひとつである収蔵(アーカイブ)の意味について考える。たんに資料を集積するだけでなくそれを利活用するためには適切な分類が必要となる。分類の人類の知的遺産として、漢籍の四部分類や仏典における三蔵があり、それらは目録として現象する。ここでは目録およびコレクションの意味について紹介することとする。

古典籍の分類については伝統的に中国の分類形式が踏襲されてきた。中国人の世界認識における分類的思考方法については、山田慶兒氏によって次のように説明されている。

中国人は実在の世界の現象的な多様性を多様性のままに認識するのを好んだ。むしろそれは、かれらが世界の体系的把握を断念したことを意味するのではない。二つの志向を統一するためにかれらがとった方法は分類であった。自然現象や社会制度から人間の感情・思想・行為にいたるまで、くまなく分類しつくそうと試みた。枚挙的な記述とその分類による世界の体系的把握である。

山田氏はこのように述べて、「項目別の具体的な記述をとおして」「類関係による世界の区分と体系化を文字どおり表現している「類書」」に注目し、その分類原理が史書、本草書、農書など他の分野の文献にも見える中国における「世界そのものの分類原理であった」と説く(山田慶兒「中国の文化と思考様式」『山田慶兒著作集』2、臨川書店、2022年(初出1971年))。

目録もまさにこのような思考方法によって、編成されたものと言える。『漢書』芸文志(資料32)やそれを継いだ『隋書』経籍志(資料33)は、たんなる書名の羅列ではありえず、書名による世界認識がそこに示されているのである。目録が生成するためにはその根拠としての「学」が必要で、目録学が中国において早い時期から確立していたことも、^{うべ}宜なわれるところである。井波陵一氏は目録学の重要な点を次のように説明する。

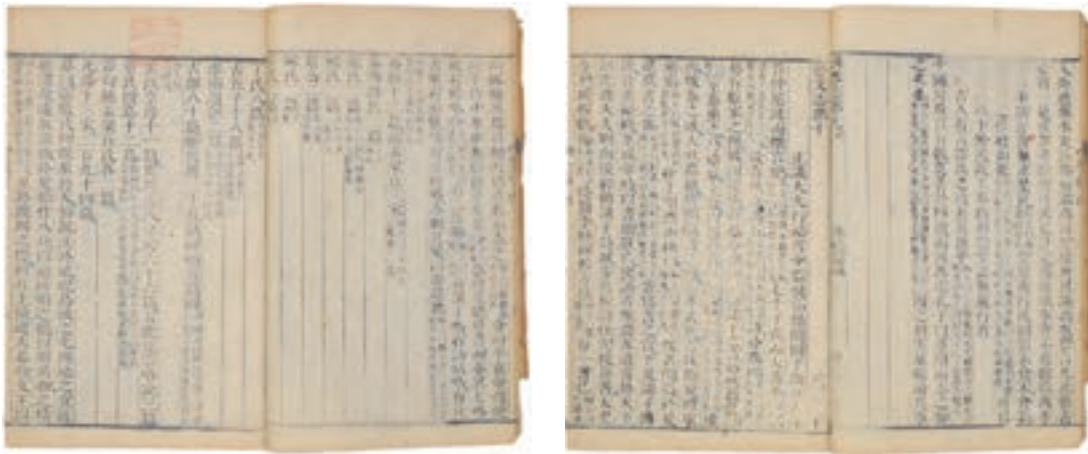
一つの目録において、なぜその書物がその場所に存在するか説明する、あるいは理解することにほかなりません。その場所にその書物を存在せしめるもの―それが根本原理としての分類法だと言えるでしょう。その時代の知的営みを図書の分類として凝縮したもの、すなわち知の座標としての目録を取り上げた時、目録学ははじめてその意義を明らかにすることになるわけです。(井波陵一『知の座標―中国目録学―』白帝社、2003年)

日本においても基本的にこの発想方法は継受されており、早く平安時代前期に撰録された当時の在日漢籍目録『日本国見在書目録』(資料34)はその表れであり、江戸時代末の代表的な文献書誌学の成果『経籍訪古志』(資料42)もその後裔と言えよう。また中国で編纂された仏教經典の目録「開元録」を受け継ぐ『大蔵目録』(資料40)にも、同様の発想は見出されるのである。

そのようにして編成された目録によって枠づけられた古典籍群は、漠とした本の集積ではなく、意味づけられた資料群として存在する。加賀前田藩5代藩主前田綱紀によって基礎づけられた前田尊経閣文庫所蔵の典籍群は、『菅家伝』(資料43)で見るように、綱紀によって分類整理され、意味づけられたものなのである。

32『^{かんじょ}漢書』 100巻24冊

(漢)^{はんこ}班固撰；(唐)顏師古注



後漢班固(32-92)による『漢書』^{げいもんし}芸文志は現存する中国書目の最古のもの。散逸した前漢劉向(前77-前6)・^{りゅうきん}劉歆(?-23)父子の『^{しちりやく}七略』が土台となっており、^{りくぶ}六部分類法(六略－六芸略〈経書など〉・諸子略〈諸子百家〉・詩賦略〈文学作品〉・兵書略〈兵法書〉・数術略〈天文暦法〉・方技略〈医書など〉－)を踏襲している。当時現存していた書名・篇数・巻数を記し、作者・時代および諸学派の源流なども記述している。

33『^{ずいしよ}隋書』 卷32-35 (二十四史:228-229)

長孫無忌等撰 五洲同文局 光緒29(1903)年刊



中国正史の一つで、唐太宗の命を受けて、最終的に顕慶元(656)年に完成した。その^{けいせきし}経籍志の四部分類は、『漢書』芸文志以来の図書分類法の集大成で、その後の漢籍分類法の基礎となった。すでに晋荀勗(?-289)『^{ちゅうけいほ}中経簿』において甲(六芸)・乙(諸子・兵書・数術・方略)・丙(史書)・丁(詩賦)の四部分類がなされ、その後、史書の盛行を受けて乙・丙の2部の順序を逆にして、^{どうけい}経籍志に至って、^{じゆんきよく}経・史・子・集の四部となった。四部の後に^{ぶつ}道経、^{ぶつ}仏経を付録している。

にほんこくげんざいしょもくろく
34『日本国見在書目録』 1冊

藤原佐世勅撰 嘉永4(1851)年跋



寛平3(891)年ころ成立か。「見在」とは現存の意で、当時宮中に存在した漢籍の目録。『隋書』経籍志に従って、四部こそ示さないが、易家から惣集家まで40家に分け、書名・巻数を記し、まゝ撰者名その他を注記する。中国の経籍志などに記載されない逸書が多く著録されており、文献学上貴重な情報を提供する。室生寺旧蔵平安時代末期古写本一帖(宮内庁書陵部蔵)が現存唯一で、本書はそれに基づいた『続群書類従』884巻所収本。

にほんこくげんざいしょもくろく
35『日本国見在書目録』 1冊 (古逸叢書 48冊のうち)

(清)黎庶昌輯 東京：遵義黎氏 光緒10(1884)年刊



『古逸叢書』は清の駐日全権公使黎庶昌編、中国本土ではすでに散逸してしまい、日本にだけ残っていた漢籍26種を集めて叢書にしたもの。明治17(1884)年東京で刊行された。主として校刻の仕事にあたったのは、前年より日本に来ていた楊守敬で、森立之らの誘導によってこれらの旧書を探り出すことができたという。『日本国見在書目録』は日本人作ではあるが、中国本土では逸失した書物を多く著録しているため編入された。



36『^{るいじゅうこく し もくろく}類聚国史目録』 1冊

江戸時代



『類聚国史』は寛平4(892)年ころに菅原道真が『日本書紀』以来の五国史および延喜元(901)年に完成する『日本三代実録』に基づいて、六国史の編年記事を、検索の便を計るため、内容によって分類・編集したもの。部類は『^{げいもんるいじゅう}芸文類聚』や『初学記』など中国類書の影響を受けている。もと200巻から成っていたらしいが、現在、巻の形をして伝えられているのは、わずかに61巻である。現存する巻などによって知られる部名は、神祇・帝王・後宮・人・歳時・音楽・賞宴・奉献・政理・刑法・職官・文・田地・祥瑞・災異・仏道・風俗・殊俗の18部である。本書は表紙に「太宰府天満宮御文庫蔵書／類聚国史残冊目録」とあり、部立ておよび細目を書き上げ、他本の情報も書き加えたもので、逸失した巻の推定資料として貴重なもの。

37『^{るいじゅうこく し}類聚国史』 1軸 (尊経閣叢刊)(複製)

菅原道真著 東京：育徳財団 昭和7(1932)年



前田育徳会尊経閣文庫蔵の平安時代末期に遡ると考えられる巻165「^{しょうずいぶ}祥瑞部上」の卷子本写本の複製。原態を伝えたもの。前田家は菅原氏の後裔を称したので、道真関連の書物を蒐集していた。
^{こうえい}

38『倭名類聚鈔』 20巻10冊

源順撰 村上勘兵衛 寛文7(1667)年刊



平安時代の分類体漢和对照辞書。承平年間(931-938)ごろ成立。約2600の漢語を分類し、その文例・語釈を漢籍から引用して、割注で字音や和訓を示す。順の序によると、中国の「^{しやう}百帙の文館詞林と30巻の白氏事類」では「^{ふうげつ}風月の興」のみで、「^{せうぶく}世俗の疑い」を決するために、和書の漢語対訳語彙集である『楊氏漢語抄』『^{べんしきりゅうじょう}弁色立成』(いずれも逸書)から語彙を集成したという。分類は基本的に中国類書を踏襲し「天地」「人物」「草木」の順に、24部128門を10巻にまとめたとある。本書は増補された20巻本。

39『本朝書籍目録』 1冊

江戸時代



編者未詳。鎌倉中期の成立。『日本国見在書目録』が漢籍の分類目録であったのに対して、本書は和書の最古の分類目録。書名493点を神事、帝紀、公事などの20部門に分類している。書名の下に巻数と作者を注記しただけの目録であるが、散逸した書物の名がみられ、鎌倉時代以前の和書に関する貴重な資料である。逆に『竹取物語』『土左日記』『更級日記』などは採録されていない。

40『^{だいぞうもくろく}大蔵目録』 3巻3冊

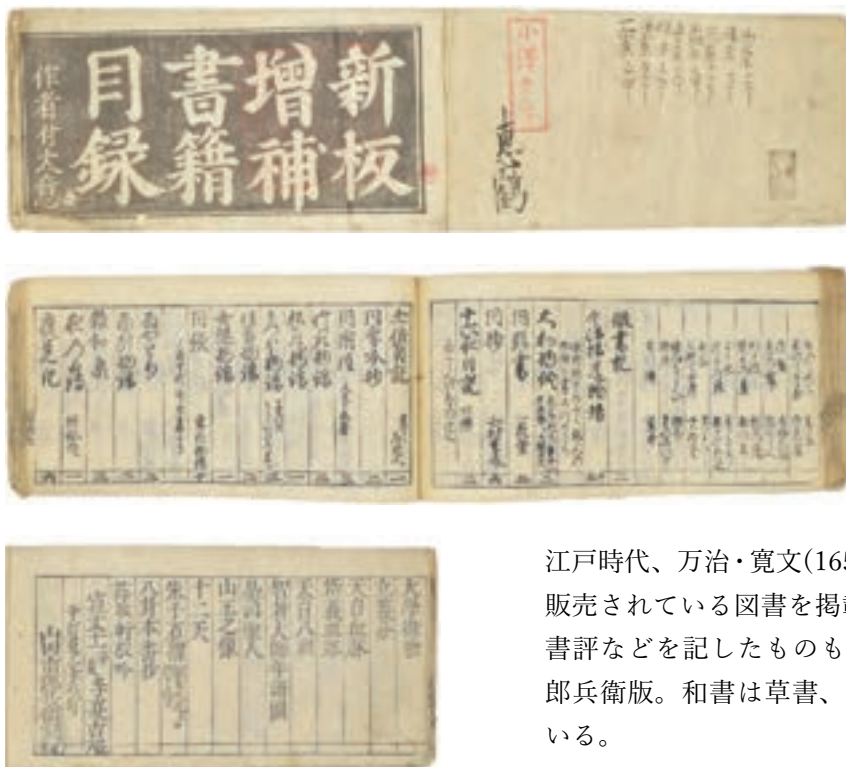
京都：西村又左衛門 寛永19(1642)年刊



仏教典籍を集成したものを大蔵經または^{いっさいきょう}一切經と言う。本書は高麗高宗23(1236)年から15年余かけて出版された再雕本の目録。江戸時代初期に伊勢の天台宗僧宗存が日本で高麗大蔵經の開版を目指すも未完に終わったが、出版にあたって慶長19(1614)年に大蔵經刊行予告の形でこの目録を出版している。本書は寛永19年に整版で復刻したもの。大乘經(般若、宝積、大集、華嚴、涅槃)、小乗經、大乘律、小乗律、大乘論、小乗論、賢聖集と中国南北朝以来の『開元録』の經典分類法に基づいている。

41『^{しんぱんぞう ほしよやくもくろく さくしゃつたりたい い}新板増補書籍目録：作者付大意』 1冊

京：山田市郎兵衛 寛文11(1671)年刊



江戸時代、万治・寛文(1658-1673)期以後の各時点で、出版・販売されている図書を掲載した目録。巻冊数、作者、書価、書評などを記したものも多い。本書は京都の本屋、山田市郎兵衛版。和書は草書、漢籍・仏典などは楷書で記されている。

42『^{けいせきほうこし}経籍訪古志』 6巻補遺1巻8冊

(日本)渋江全善, (日本)森立之撰 光緒11(1885)年序



江戸時代末に日本に伝存した漢籍の古写本、古版本を解説した書。森立之(^{きえん}枳園)らの編で全8巻。安政3(1856)年成立。中国宋・元・明および朝鮮の古版本、日本の慶長(1596-1615)以前の古写本や古活字版など760部を四部分類で収め、書名、巻数、所蔵者、序跋、奥書、蔵書印記などを詳細に記録している。清朝考証学を継受した江戸期における書誌学屈指の業績である。本書は中国清代に鉛活字で印刷刊行された。

43『^{かんけでん}菅家伝』1軸 (尊経閣叢刊)(複製)

侯爵前田家育徳財団編 東京：侯爵前田家育徳財団 昭和19(1944)年



菅原道真(845-903)没後30年あたり930年ころに成立したと考えられる道真の最古の伝記。鎌倉時代の古写本が鎌倉荏柄天神社に伝わり、本書はそれを元禄2(1689)年に加賀藩主前田綱紀(1643-1724)が模写させた尊経閣文庫蔵本の複製本。原本内題は「北野天神御伝并御託宣等」であるが綱紀が「菅家伝」と名付けた。巻頭に来歴を記した綱紀の識語があり、紙背に「証本 史中 伝」と自筆朱書による分類が書かれている。

参考文献一覧

※ 著者五十音順

第I部

- ・「和書のさまざま」国文学研究資料館電子展示室
<https://www.nijl.ac.jp/etenji/washo/index.html>
- ・筑波大学附属図書館編『筑波大学和漢貴重図書目録』筑波大学附属図書館 1996年
- ・筑波大学附属図書館編『慈雲尊者と悉曇学－自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界－』筑波大学附属図書館 2010年
- ・筑波大学附属図書館編『日本人のよんだ漢籍－貴重書と和刻本と－』筑波大学附属図書館 2011年
- ・筑波大学附属図書館編『江戸の遊び心－歌川国貞の描く源氏物語の世界－』筑波大学附属図書館 2017年

第II部

- ・王孫涵之「義疏概念の形成と確立」京都大学人文科学研究所『東方学報』第97冊 2022年
- ・片桐洋一『伊勢物語古注釈書コレクション』和泉書院 2000年
- ・片桐洋一・山本登朗『伊勢物語古注釈大成』笠間書院 2008年
- ・川瀬一馬「正平本論語攷」川瀬一馬『日本書誌学之研究』大日本雄辯會講談社 1943年
- ・川瀬一馬「近世初期に於ける經書の訓點に就いて－桂庵點・文之點・道春點をめぐりて－」川瀬一馬『日本書誌学之研究』大日本雄辯會講談社 1943年
- ・高木三男「正平版論語集解 残板本」筑波大学図書館報『筑波大学附属図書館報 つくばね』第10巻第3号通巻37号 1985年1月
- ・前田金五郎・森田武『仮名草子集』（日本古典文学大系90）岩波書店 1965年
- ・吉田健一『「論語」新注本における「之」の読み方について』日本漢字学会『日本漢字学会報』第5号 2023年

第III部

- ・茨城県史編さん原始古代史部会『茨城県史料 古代編』茨城県 1968年
- ・加藤弓枝「正保版『二十一代集』の変遷：様式にみる書物の身分（付）八尾助左衛門・勘兵衛・甚四郎出版略年表」『雅俗』19号 2020年7月
- ・神鷹徳治「悲劇の善本 朝鮮銅活字版『白氏文集』：那波本の生誕を繞って」『アジア遊学』12号 2000年1月
- ・川上新一郎『古今和歌集』版本諸版一覧』『斯道文庫論集』18輯 1982年3月
- ・川上新一郎「古今和歌集版本考：前稿の補訂をかねて」『斯道文庫論集』34輯 2000年2月
- ・川上新一郎「古今和歌集版本考(続)」『斯道文庫論集』35輯 2001年2月
- ・川瀬一馬『増補 古活字版之研究』日本古書籍商協会 1967年

- ・久曾神昇『古今和歌集成立論』風間書房 1960-1961年
- ・奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観 補訂版4 法隆寺四』岩波書店 2001年
- ・西下経一『古今集の伝本の研究』明治書院 1954年
- ・橋本雅之「西野宣明校注『訂正常陸国風土記』の本文校訂について(上・下)」『相愛国文』10号・11号 1997年3月・1998年3月
- ・花房英樹『白氏文集の批判的研究』彙文堂書店 1960年
- ・平子鐸嶺(尚)『百万小塔肆攷』平子尚 1908年

第IV部

- ・井波陵一『知の座標－中国目録学－』白帝社 2003年
- ・小山正文「宗存版『大蔵目録』」『同朋大学仏教文化研究所紀要』22号 2003年
- ・五島美術館・大東急記念文庫編『狩谷掖斎と経籍訪古志－大東急記念文庫所蔵の漢籍から－』五島美術館・大東急記念文庫 2019年
- ・宋兆霖編『鄰蘇觀海－院藏楊守敬圖書特展－』國立故宮博物院 2014年
- ・真壁俊信『天神信仰の基礎的研究』日本古典籍註釈研究会 1984年
- ・山田慶兒「中国の文化と思考様式」『山田慶兒著作集』2 臨川書店 2022年(初出1971年)

全体にかかわるもの

- ・井上宗雄 ほか『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店 1999年
- ・井上進『中国出版文化史 書物世界と知の風景』名古屋大学出版会 2002年
- ・川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂書店 1982年
- ・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫『図説書誌学 古典籍を学ぶ』勉誠出版 2010年
- ・渋谷綾子・天野真志『古文書の科学 料紙を複眼的に分析する』文学通信 2023年
- ・高橋智『書誌学のすすめ 中国の愛書文化に学ぶ』（東方選書40）東方書店 2010年
- ・陳国慶著 沢谷昭次訳『漢籍版本入門』研文出版 1984年
- ・長澤規矩也『図書学辞典』三省堂 1979年
- ・中野三敏『江戸の板本 書誌学談義』岩波書店 1995年
- ・橋口侯之介『和本入門 千年生きる書物の世界』平凡社 2005年
- ・廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社 1998年
- ・藤井隆『日本古典書誌学総説』和泉書院 1991年
- ・堀川貴司『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』勉誠出版 2010年
- ・山岸徳平『書誌学序説』岩波書店 1977年

掲載資料一覧

資料番号	資料名	請求記号
1	住吉物語絵巻 2軸	ル 120-364/ 貴
2	住吉物語 5巻4冊(巻1欠)	ル 120-386/ 貴
3	悉曇要決 4巻4冊	チ 425-30/ 貴
4	浦風 3巻1冊	ル 120-353/ 貴
5	蒙求 1冊	イ 290-115/ 貴
6	嘉慶2年4月5日[足利義満御判御教書]	北野社 / 貴
7	長秋詠草 3巻1帖	ル 216-166/ 貴
8	源氏物語 54巻付1巻53冊(欠2巻)	ル 120-44/ 貴
9	土左日記 1巻 (尊経閣叢刊)(複製)	イ 300-イ-58
10	孝経 1冊	ロ 850-126
11	孝経 1冊	ロ 850-121
12	新古今和歌集 20巻2冊	ル 210-77/ 貴
13	伊勢物語 2巻2冊	ル 120-212
14	伊勢物語肖聞抄 3巻3冊	ル 120-157/ 貴
15	伊勢物語惟清抄 1冊	ル 120-158/ 貴
16	伊勢物語(真名本) 2巻1冊	ル 120-454
17	仁勢物語 2巻2冊	ル 150-6
18	論語集解 2冊	ロ 860-200/ 貴
19	論語集解 10巻2冊 (古逸叢書 48冊のうち)	ロ 860-202
20	論語集解義疏 10巻4冊	123.83-Ka11-1
21	論語(朱熹集注) 10巻4冊	ロ 869-88
22	桂菴和尚家法倭点 1冊	チ 415-5
23	論語白文 2冊	ロ 869-15
24	論語古訓正文 2巻1冊	ロ 860-68
25	百万塔 附無垢浄光大陀羅尼經自心印陀羅尼 1枚(1基)	183.58-H99/ 図情貴
26	伴善男物語 3巻1軸	カ 210-415
27	白氏文集 71巻(巻24-37欠)目1巻 14冊	ル 335-90/ 貴
28	訂正常陸国風土記 1冊	ネ 314-1
29	訂正常陸国風土記 1冊	213.1-N85
30	古今和歌集 20巻2冊	ル 210-110/ 貴
31	古今和歌集 20巻2冊 (二十一代集 56冊のうち)	ル 106-30
32	漢書 100巻24冊	ヨ 624-28
33	隋書 巻32-35 (二十四史:228-229)	222.01-N73
34	日本国見在書目録 1冊	イ 050-1340
35	日本国見在書目録 1冊 (古逸叢書 48冊のうち)	イ 350-59
36	類聚国史目録 1冊	イ 050-75
37	類聚国史 1軸 (尊経閣叢刊)(複製)	イ 300-ハ-58
38	倭名類聚鈔 20巻10冊	イ 200-32
39	本朝書籍目録 1冊	イ 050-51
40	大蔵目録 3巻3冊	ハ 100-23
41	新板増補書籍目録:作者付大意 1冊	イ 050-53
42	経籍訪古志 6巻補遺1巻8冊	イ 050-1178
43	菅家伝 1軸 (尊経閣叢刊)(複製)	タ 500-854

※附属図書館の貴重図書は、請求記号の末尾に「 / 貴」と示した

企画

筑波大学附属図書館

西尾 チヅル(館長)

島田 康行 (副館長・研究開発室長)

熊渕 智行 (学術情報部長)

筑波大学附属図書館研究開発室

谷口 孝介 (人文社会系教授)

筑波大学人文社会系

葛西 太一 (准教授)

茂野 智大 (助教)

附属図書館企画展ワーキング・グループ

真中 孝行 (主査)

石津 朋之

大石 柁洋

大久保 明美

高島 恵美子

藤田 祥子

保立 桃果

西 彩花

森島 葉月

電子展示Web

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/permanent-exhibition>

筑波大学附属図書館常設展

古典籍のインターフェース

令和5年11月20日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2023

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

ISBN 978-4-910114-47-7